

市民科学講座 B コース 第 11 回

中田哲也さん、私たちの食べものや農業は
この先どうなっていくのでしょうか？
(下)

講師：中田哲也さん

(質疑応答)

Q: 地球全体の人口と食料の問題について、それから TPP と日本の食料への影響についてお聞きしたい。

中田：世界の人口は当面 90 億人くらいまで増えると言われていまして、食料の需要に対する重圧は増加します。人口が増えるだけではなく、特に中国やインドといった所謂「中進国」と言われる人口の多い国が、所得が向上して穀物中心の食生活から畜産物などをたくさん消費するようになってくると、それが人口増以上に何倍にも需要が増えて行くということになります。

実は今までも食料需要は増えてきており、それに見合うように食料供給も今までは増えてきました。それは主として農地面積というよりは、農地面積当たりの、例えば 1ha 当たりでどれくらいとれるかという、これを単収とか単位当たり収量と言いますが、それが非常に伸びたのです。途上国における「緑の革命」というのがありましたが、それは化学肥料を多用すればどんどん穫れるという品種が開発された、そういうものが普及することによって食料の供給も増えて、増加する需要を賄ってきた。それが今までの傾向です。

ところが、単位当たり収量が最近は何ほど向上しなくなってきました。食料価格の高騰の一つの背景にもそういった事情があると思っています。もし単収が増えないということになると、これから増えていく食料需要を賄うのはなかなか難しくなる可能性があります。

「だから遺伝子組み換えが大事だ」と主張する人たちもいます。今までにないような技術開発によって食糧生産を増やさないとしても需要が賄えないという主張です。ただ、実は飢餓の問題も実はそうなのですが、生産量そのものよりは分配の話なのです。

日本人、あるいはアメリカ人はもっと極端ですが、途上国の人の何倍ものカロリーを摂取しているわ

けです。車のガソリンなどエネルギー使用量にも大きな格差があります。今のような状態、国際的な格差があるままでは、飢えの問題はなくなる、いくら食料の生産量が増えても解消しないと思います。

さらに言えば、同じ先進国の中でも格差が生じつつあるという観点も必要なだろうと考えています。

TPP については、政府は国内生産にはそれほど大きな影響はないという試算結果を出しています。

それは、関税が削減する代わりに例えばセーフガードという新たな措置を設けること等により国内生産は維持される、農家の所得は維持できるという試算結果となっています。

ただ、日本の農業の一番大きな課題はやはり米なのです。生産額としても単一の品目としては最も大きいですし、水田は地域の環境を守っているという面もあります。また、生産者は一番多い。生産者が多いということは構造改革がそれだけ進んでいないということにもなるのですが、米の消費はどんどん減っています。毎年 8 万トンくらい減っています。だから TPP があろうとなかろうと米生産は非常に厳しい状況にあるということは間違いなく、関税云々の議論以上に私たちの消費量減少の方が大きな影響があります。

これはどうすればよいのか私もよく分かりませんし、これだけ食生活がいろいろ豊かになっている中で「お米をもっとどんどん食べましょう」と言ってもそれはなかなか難しい。例えば、以前は学校給食に補助金を出したりしていましたが、現在は財政的にもうできません。また、国境措置を強化するというようなことができる訳もありません。

私たち消費者がどれだけ、どういった食べ物を選択していくかによって米の消費量もまた変わってくるのだろうと思います。

いずれにしても私たち自身の問題として米をはじめとする日本の農業をどうするかということを考える必要があるのではないかと思います。

上田：今お米のことが出ましたが、中田さんの話の中で一つは消費者の選択、食べ方の問題を含めてそれが大きく変われば結構前進して行く部分があるのではないかという議論がありました。

一方で国際的な流れを見ると食料生産の頭打ちというか、言ってみれば食料の奪い合いのようなことが起こることも想定できるというなかで、何か一つやれば全てうまくいくということはなかなか見えない、多分ないのではないかという気がします。

例えばこういう選択はどうかとか、こういうやり方をしてみたらどうかという意見がありましたら、そういうことも出していただきたいと思います。

Q：図の 26 の「輸入食料のフード・マイレージ」で少し違和感があったのでご質問します。中国の数字がでていないということもありましたが、日本がえらく突出しているのですが、これは総量なので、例

えば韓国の人口は日本の1/4なので、一人当たりになれば韓国のほうが日本より多くなるのではないのでしょうか。

中田：韓国は日本の4割（※日本1億2,730万人、韓国5,022万人 いずれも2013年）くらいなので、1人当たりフード・マイレージはほぼ同じです。日本のほうがちょっと大きいくらいになります。

CO₂の排出量を見るときは総量のほうが大事ですので、まず総量を出しています。私もこういうお話をするときには一人当たりと総量と両方並べてやることが多いのですが、今日はちょっと端折ってしまいました。ご指摘の通り一人当たりでみないと総量だけだと個人の食生活との繋がりはよく見えません。

Q：食料需給の問題は貨幣経済と環境問題の矛盾のようなところに根があるのかな、という気がしています。例えば日本で農業人口を減らして二次産業三次産業に人口を移すことによって経済発展してきた訳なので、もし日本人が米作りに拘っていたら現在の発展はなかったと思います。

日本としては、家畜の餌を含めて食料を大量に輸入している代わりに、省エネ型エアコンを作って世界に貢献しているとか、そういうことをきちんと評価しないと農業問題だけで評価は難しいと思います。それについてはどのようにお考えになりますか。

中田：全くその通りだと思います。私は基本的には市場経済とか自由貿易というのはメリットが非常に大きいと思っています。ある意味で国際分業論のような話で、それはおっしゃる通りだと思います。

日本は米は守ってきました。米だけ偏重してきたということがまた問題なのですが、小麦や大豆、飼料穀物などは最初から国内で自給しようとする事はなかったわけで、そういうものは海外からの輸入に依存することを国の方針として決めてきたわけですから。飼料穀物の関税などは極めて早い時期から撤廃してしまいました。国内で飼料用に使うトウモロコシなどは免税するという制度を作り、海外の安い飼料によって国内で畜産を行うことによって、肉や卵も比較的安価に供給できるようにしてきたのです。

それは一つの経済合理性です。卵は物価の優等生などとよく言われますが、そういう話をすると卵の生産者の方には「私たちはいつも安くて困っているんだ」と言われますが、そういった加工的な方法によってある意味で経済合理性は貫かれてきたのだと思います。

しかしこれからのことを考えると、食料はこれまでのように安定的に海外から輸入できる確実性は徐々に乏しくなっていると思います。食べ物というのは生きて行く上で必須です。震災のときもそうですが、水とか食べ物がまず一番大事です。そういうものをある程度、国産だけではなくもちろん輸入と組み合わせつつですが、ある程度は国内で供給できる体制を作っていくということが、これからは一層必要になってくるのではないかと考えています。

また、日本の工業製品には今までのような国際競争力が失われてきたということも言われています。

昔ほど外貨も稼げなくなるかもしれない。そうなってくるとなおさらある程度は国内で食べ物を賄って行くということも必要ではないかと、個人的には考えています。

Q：さきほどのフード・マイレージのグラフで、飼料は穀物に入っているのでしょうか。だとするとその飼料がかなりの部分を占めているのでしょうか。

中田：入っています。穀物の半分以上は飼料用の穀物です。畜産に入っているのは輸入している肉や乳製品です。

なお、このグラフは輸入食料の数字ですので、国内で生産した米のフード・マイレージはこれには入っていません。

日本が他の国に比べて輸入食料のフード・マイレージが大きい理由は以下のようなことです。

例えばアメリカが多く輸入しているのはメキシコやカナダです。近隣なのです。EU もそうです。EU 域内の輸入が多いので輸送距離が短いのです。

日本はトウモロコシにしても大豆にしてもアメリカやオーストラリアといった遠距離を運んできていう特徴があります。

Q：もう一つの特徴として油糧種子が多いのですが、これは菜種とか大豆だと思いましたが、これは重量ベースでもマイレージにすると多くて、しかもカロリーベースでも油脂が多くなっているということだと思います。

日本食といえば味噌汁も豆腐も大豆ですが、みんな輸入で、かつ油に依って健康を害している、それだけではなく最近知ったのですが、モザンビークに新たな大豆畑を開発するということを日本の商社がやっていて、そうするとモザンビークの伝統農業を破壊して、その場所に大豆畑を大規模に作るつもりとしており、モザンビークで反対運動が起きているというようなこともあり、このグラフにはそういうことが反映されているのかなと思います。

中田：この油糧種子は大豆、菜種がほとんどで、そのほとんどが搾油用です。大豆や菜種の形で輸入して国内のメーカーが製油すると形でいままでやってきています。

これも仮に、油をそのまま輸入すればフード・マイレージは減りますね。さっきの話で言えば飼料の輸入をやめて肉を直接輸入するにすればフード・マイレージは大きく減ります。フード・マイレージだけ考えれば国内の畜産をやめた方がよいということになります。

でもそういう話でもないと思います。消費者の安心感等にも関わってきます。

モザンビークの話はよく知りませんが、それはいわゆるプラテーションですね。帝国主義時代のプラ

ンテーションはまさに途上国の伝統的農法を破壊して商品作物を生産し、その結果として地域で自分が食べるものがなくなってしまうということが指摘されています。

おそらくモザンビークで生産した方が国内で生産するよりもコストは安いでしょうね。

逆にいうと消費者が国産の大豆でも少し高くても買うという選択をする人が増えていけば、国内の大豆生産ももっと増えていくかもしれないということだと思います。

上田：大豆については私も調べたことがあります。戦後間もない頃に大豆の供給が減ってきそうだと
いうときに、アメリカに商社が赴いて日本向けの大豆を生産する沢山の農家と契約したということが始
まっています。そうすると入っているものの価格が日本国内で生産したものに比べて極端に安くなっ
てしまい、輸入量がどっと増えてしまったという現状があり、もう後戻りできない。

今は中国が世界最大の大豆輸入国となっており、日本が買い負けているような問題もあり、そのよ
うな流れの中でモザンビークのような話も出てきているのではないかという気がします。

Q：フード・マイルージが増大することの負の面として、食料を輸送するためにポストハーベットの農
薬を使う、そういうものの怖さはどうなのでしょう。

中田：おっしゃる通りで、それはあります。その問題については具体的な研究はしていません。

ただ、食の安全性や安心感に関わってくるのですが、トレーサビリティという観点からすると輸送
距離が長くなればなるほど、一般的に流通の過程を監視する難しさは高まります。

また、今仰ったような長距離輸送するためにそういった薬剤を使うということも増えてきます。

そういうリスクも増えてくるという問題意識はありますが、その点について深く分析するとい
うことはできていません。

Q：国内のものをもっと買えるのに海外のものを買ってしまうために、国内で生産したものが余っ
てしまうということがあるのでしょうか。

中田：それはその通りだと思います。国内生産にはまだまだ余力があり、現に耕作放棄地や不
作付地も増加しており、需要が増えれば国内生産は増えていくのだらうと思います。

Q：国内生産したもので一億人の食を賄えるのか、どの程度の需要を賄えるのでしょうか。

中田：食生活の水準によると思います。今のように豊かな、こんなに贅沢な食生活をやってい
れば到底それは無理です。

輸入が途絶するような最悪の時でも最低限生きて行くために必要とする最低限のカロリーをなんとか確保するだけの農地面積とか農業者は確保していかなければいけないだろう、というような考えで食料安全保障の試算等を行っています。

国内でなんとか日本の全員が生きていくだけの農地や担い手はぎりぎり確保できているという状況だと思います。

ただし、その時の食生活というのは芋などばかりになってしまいますので、およそ幸せな状況ではないと思います。

Q：籠城みたいな状況になっても一応今のところ日本は安心だと考えてよいでしょうか。

中田：第二次世界大戦時は国会議事堂の前も芋畑になっていたというのですが、同じようなことになるかもしれません。

そういうときには、種芋や肥料が確保できるかといった問題もあります。種芋はそもそも生産が減っているのだから少なくなっているかもしれませんし、肥料の原料も海外から大量に輸入しています。そういった生産手段のほうも厳しくなっていることを考慮すれば、決して安心できる状況ではないと思います。

全く輸入がなくなるというのは極端なケースではありますが、そのような時でもなんとかやっていけるという計算には、一応なっています。安心できるというレベルではありません。

その時はもうみんなが耕すしかないですね。

Q：そうするとエネルギーの自給も関係してきますね。

中田：しますね。今の日本の農業はどんどん大規模化、効率化を進めており、農業機械もたくさん使っています。だからいくら食料自給率を上げてエネルギーが入ってこなければ意味がないという議論があります。それはそうなのですが、ほんとうにそうなったときは、トラクター動かせなかったらみんなが耕しますよね。食べ物、農業は工業製品とは違うと思います。

本当に飢えた時には生米をかじっても生き延びようとするでしょうね。

上田：最近子どもの食育関係で世代を超えて食を通していろんな交流ができないかということをやっています。一ヶ月くらい前に70代、80代お婆さん5人くらいに集まっていたいてお話を聞きました。戦時中や戦後間もない頃の食糧（注：ここは「食糧」でいいと思います。）事情と自分たちが疎開した先で何を食べたかというような話がどっと出てきました。今の子どもたちの食生活は信じられないことになっているということを語っていらっしやいました。それこそ芋とか茎や葉まで全部調理して食べるということまで徹底してやっていた時代だったということです。

それは食べるものがなかったからそうせざるを得なかったという面もありますが、今日伺った食料廃棄のこととかを考えると、そういう時にある種の知恵を発揮していたということもあると思います。その辺の世代の代わり目で食べ物の事情がどんどん変わって行く、そして昔のことは思い返さなくてもいいんだというようになっているのは、どこかおかしいのではないかという気がします。

中田：おっしゃる通りです。昔の人は自分で作ろうと思ったら作ることができたんですね、野菜など。今は多くの人はできないですね。

Q：ロシアの「ダーチャ」が注目されているようです。自給的で市民がそれぞれカントリーを持って自分たちで自給している。私は日本ダーチャ計画というようなことを妄想しています。今仰った飢饉のときの自給作物なども含めて、農業従事者の方々を応援に行くとか、自分たちで畑や田んぼを借りて水と最低限の米と少しの野菜を作るというようなことが持続可能に近いのかなと思います。そういうことについてはいかがでしょうか。

中田：私が話すより高月さんから話してもらったほうがいいかもしれません。

旧ソ連から政権が今のロシアに変わる過程で大きな混乱があったのですが、飢える人がいなかったと言うのです。

それはなぜかという、都市住民が田舎にダーチャと呼ばれる畑などを持っていて、そこに時々行って自分で生産するということが非常に広がっていたためです。

そういうのはとても大事だと思っています。ドイツではクラインガルテンという市民農園のちょっと大きいようなもので泊まれるようなところがあったりもする。

キューバではソ連崩壊後のアメリカの貿易封鎖（1990年代はじめ）によりエネルギーなどが途絶したとき、都市住民も全部みんなで耕して食料を自給、しかも有機農業でやってしまったという事例もあります。

だからやろうと思えばできるという面もあるし、東京のような都会の人間も土に触れるような機会をどんどん増やしていくことは大事だと思います。

そういうことに先進的に取り組んで、交流事業などをやっている人たちも沢山いますし、そういうところにどんどん行ってお手伝いをさせてもらい、まず自分でやってみるということだと思います。

自分で作ってみると、私も狭い市民農園ですが作ってみると、自然の恵みのありがた味が実感できずし、一方でこんなにやってもできないんだな、難しいなと思うこともあります。スーパーであんなに綺麗な野菜が並んでいるのが不思議に思います。今日、お配りしたトマトはF1だから比較的きれいですが、大きさもバラバラです。でも自分でやってみると生産のを知ることができる。作る人・食べ

る人と分けるのではなく、自分も食べものの生産に携わってみることは大事なことかと思えます。

東京都内にも、江戸東京野菜も含め、生産されている方は沢山いらっしゃいます。そういうところに見学にいたり、イベントも沢山行われていますので少しお手伝いしてみるとかいうのもすごく大事な経験になると思います。

都市農業というのは、これまで農業政策としては手を離してしまっていたようなところがあったのですが、現在は都市計画の面からも今も国土交通省もあれは都会のオープンスペースとして防災面も含め非常に重要だというふう意識が変わってきています。都市農業推進基本法が 2015 年に成立し、都市農業の多面的な役割を見直そうという流れにはなってきています。

Q：今、埼玉県東松山市で 500 坪の農地を借りて、住んでいる池袋から往復 5 時間かけて通って農作業をしています。

それはどういうことになるのか、生産におけるマイルージなのか（笑）？というのがありますが、自分としてはいろいろな学びと気づきがあります。仕事もきついとは思っていないのですが、戯れることが今後の 30 年、50 年後に自分が土に戻るとい活動としてやると意味があるのかなと感じます。

上田：農業が他の産業と決定的に違うのは生き物を扱っているということですね。生き物を育てているということで、今仰ったようにいずれ人間も死んで土に帰るみたいなどころと何かすごい親和性があります。そういう意味で誰もが工業生産とか技術を身につけなければいけないみたいな教育ではなくて、誰もが土に触れ生き物を育ててということがベーシックというか、誰もがやってみてよいことだし、誰もがやれるべきことだと思います。残念ながら教育の中ではそこまでは行っていません。

中田：昔に比べれば今のほうが食育など熱心に進められてきていますので、私の世代よりも今の子ども達の方が、そういうことに触れる経験は多いと思います。

Q：今家庭菜園の話が出ましたが、私が子どもの頃に 300 坪の畑を自分で耕していました。畑ですので主に麦とかサツマイモ、ジャガイモ、それからゴマを植えてごま油をとったり、大豆を作ってそれを全量豆腐屋さんに買い上げてもらって、毎日豆腐を一丁ずつ買っていたという生活をしていました。

長らくサラリーマンをやってそういう生活から離れていたのですが、最近マンションに引っ越してからやけに土に触りたくなり、大きめのプランターをぎっしり並べ、わずか 2 坪ほどの面積しかありませんが、そこから我が家で食べる野菜の 1~2 割は供給できます。

太陽エネルギーは 1 平米あたり 1.4kw で、どれくらいのエネルギーが固定化されているか計算してみたら、結構 1、2%は固定されています。バイオマスの標準が 2%生産して 1%が呼吸で失われて最終的にのこるのは 1%と言われています。農産物として収穫できるものを全部フライパンの上に乗せて乾燥

させ、乾燥重量と炭化させた重量を計って計算したものです。いろんな研究会で私の1坪農法の話をするると皆んな面白がっています。

今の時代の農業というのは食料生産の面もあるし、教育の面でも重要だと思います。バイオマスの計算などは測定するととても面白いです。乾燥重量と炭化重量を測ると、 $C_6H_{12}O_6$ に相当する量が化学式の通りに出てきます。

Q：今日のお話は食料の問題が基本ですが、農林水産業としては林業の部分があります。飛行機の窓からみると日本はほとんど森林で、東京などの大都市には人が住んでいて、あとは川べりに少し人が住んでいて、森林は76%くらいだと思います。

ところが国産材を使わないで輸入していると聞きます。林業はほとんど成り立っていないのかなと思います。林業は環境とか水の問題、飲水もそうですが稲も水がなければ育たないわけで、森林の果たす役割は非常に大きな課題があると思います。林業の問題についてははいかがでしょう。

それから私は団塊の世代なのですが、西東京の清瀬というところ辺りで高校の友だちが何人か農業をやっています。ちょうど親の世代が亡くなって相続の課題が出てきて、都会に近いところなので何億という相続税なんだそうです。そうすると農業をやっていかれなくなってしまい、持っている土地のかなりの部分を手放す。その土地はマンションになったりするわけです。日本で農業をやっていくことは潰れていって当たり前なのではないか。近郊農業ということもあるのかもしれませんが、そういう話を友だちから聞いて明るくないなと思っています。

中田：おっしゃる通り、そこは都市農業の最大のネックなのです。都市農業を振興するようなことを農水省も国交省も言っていますが、税制面を解決しないといけないのです。

市街化区域内の農地税制については、例えば相続税の納税猶予などの仕組みはいろいろあり、少しずつ使い勝手がよいようにしてはきているのですが、終身営農が義務づけられるなど、自分に何かあった時に農地を売れなくなってしまう、臨機応変に対応できなくなるので、どうしても一部は売らざるを得なくなる人が多いのが現実だと思います。

非常に難しいところがあって、やはり私有財産である以上、税の公平化の観点も重要だと思います。

知り合いの方にそういった都市部の農業をやっている方が居られるということですので、そういった方と交流する機会がもっともっと増えていけば、もっと公共性が認められていくようなことにもなるのではないかと思います。

いずれにしても大きな課題ですが、都市農業の振興は大事なことです。注目していきたいと思えます。

林業の問題については、おっしゃる通り日本の森林率は世界でみても世界で3番目くらいで、日本は

ほんとうに森林国なのです。

やはり林業も儲からないというので、林家もどんどん減ってきています。その一方でやはり輸入材がどんどん増えてきていることによって住宅の建材などが海外から沢山入ってきています。

それについては実は、ウッドマイルズ研究会というのがあって地場産の木材で建てた場合とカナダから輸入した建材で建てた場合で住宅1棟当たりどれくらいCO2の発生が違うかといったことを研究している方がいます。ウッドマイルズ研究会でホームページ (<http://www.woodmiles.net>) もあると思います。

実は日本の森林は今まであまり伐採していなかったものですから、貴重な資源、宝の山的になっています。最近ロシアが丸太の輸出に関税をかけるようになったこともあり、日本の木材の自給率は今少しづつ上がりつつあります。

チップやパルプなどの材料はまだまだ輸入が多いのですが、建材用の木材はかなり自給率が高く5割くらいになっていると思います。林業は環境面など他にもいろいろ良い面がありますので、そういうことに注目していけばこれからどんどん国内林業も良くなっていくのではないかと思います。

今注目されているものに”CLT” :Cross Laminated Timber (クロス・ラミネイティド・ティンバー) というのがあり、木材を直角に貼り合わせて行って合板を作るのですが、ヨーロッパなどではそれで高層建築が多く建てられています。「里山資本主義」で紹介されて有名になりました。

それが日本では認められていなかったのですが、今、建築基準法などが改正されたりしていますので、そういったものもこれから増えてくると思います。また、公共施設には木材を使おうという法律もできています。ちょっとずつそうした木材建築も増えてきているし、これからもっと増えていくと思います。

日本の林業はもちろん厳しい面はいっぱいあるのですが、まだまだこれから良くなっていく面もあると思います。国産材をどんどん使いましょうという取り組みもやっています。「木使い運動」というのです。例えば割り箸が全て環境に悪いというわけではなく、日本の間伐材で作った割り箸を使いましょうという活動をしている団体もあります。そういうことにも是非関心をもっていただければと思います。

Q：生物多様性の観点から伺いたい。里山を作ってきたのは伝統的な農林業の働きかと思います。私は大学の農学部教員なのですが、農学部の大部分の先生は生産の仕事をしていて私は生物多様性の仕事をしているので、全く接点がなくいつも一人なのです。

授業でレポートを書いてもらうと、生産系の学生では「生物多様性地域戦略の中で環境保全型の農業は生物多様性の役割を果たすと書いてあるが自分たちはそういうことは認められない。農業は生産を最大にしたいので環境保全のためにやっているのではない。」というのが多かった。あと都市のエコロジカル・ネットワークとかを考えたときに害虫とか農業に害を与えるものもエコロジカル・ネットワークでいろんなところに行けるようになってしまうのではないかと。だから都市のエコロジカル・ネットワー

ク、都市の生物多様性を高めることと環境保全型の農業は、学生からみると実は一致しないことのようにです。

そういうことについてはどうお考えになるでしょうか。

中田：それも難しくて非常に重要な議論だと思います。

農業政策には産業政策と地域政策の二種類があります。

産業政策はやはり規模拡大、効率化。生産性の向上、構造改革を進めていかななくてはならないというのが一方にあります。

でもそれだけでは今仰ったような生物多様性などでいろんな問題が出てくるので、他方で環境支払いのような政策、環境保全型の農業に直接支払いをするという施策を地域政策の一環としてやっています。

その両方のバランスが必要だと思います。環境のためだけに農業をやっているわけではありませんが、生産性向上のためだけにやっているわけでもない。もっと言えば、そういった里山のいろんな環境が守られることによって結果として、例えば農薬や肥料を大量に施用しなくても済むような、物質循環とかエネルギー収支のようなことも含めた上での生産性を考えた場合にはより効率的な農業が実現できるかもしれないですね。

少しずれますが、金沢大学には昔から里山などに非常に熱心に取り組んでいらっしゃるグループがあります。特に能登の里山・里海というのを非常に重視し、生産性向上だけではなくそういうことに取り組んでおられる人たちがいて、それが世界農業遺産というものに日本で最初に認定されたのです。

そういったものの価値は、世界的にみても非常に重要なものであるという認識は世界にもあるのだろうと思います。そういう取り組みがもっと広がっていけばよいですね。

Q：食べ物を捨てる率ですが、このスライド p18 の図の中に日本が入っていないのですが、日本は世界で一番食べ物を捨てている国だというような刷り込みがされていた気がしますが、世界が 13 億トンでいろいろ計算してみると、日本は一人当たり 14.8 kg という数字が出ています。そうするとヨーロッパなどと比べて決して突出して日本が食べ物を捨てているというふうには判断しにくいと思いますがいかがでしょうか。

中田：まず、この p18 のグラフは多分アジアの先進工業地域の中に日本が入っていると思います。

廃棄の率を国際比較したものはすぐには思いつかないので、量としては分かりません。

国際比較については調べてみたいと思います。

日本のロス大きいと思います。その背景の一つは、流通の話になるのですが、3分の1ルールという

のがあって、賞味期限の3分の1以内でないと店頭には並べられない。賞味期限残り3分の1が切れてしまうと店頭から撤去されてしまう。その分はロスになってしまいます。

そんなルールは日本だけらしいのです。なんでそんなことをやっているかという、日本人はスーパーに行って牛乳でもなんでも買う時に奥から取る。ちょっとでも賞味期限の長い商品を取る。そういった消費者の行動が実は食品流通全体の非効率性に繋がっていて、結果として食品ロスの増大にも繋がっているんじゃないかという問題意識があります。そこで、行政だけではなく流通や外食関係の人たちといっしょに如何にロスを減らすかという運動を、このp18にある「食べ物にもったいないをもういちど」というマーク、ろすのん君というのですが、国民運動的に広げていこうというのがあります。

実際に商取引の見直しのようなことは少しずつですが始まっています。さらにはフードバンク等の取組も、まだまだ日本では少ないですが広がってはいます。

今の「3分の1」よりもっと酷いのは、缶詰を出荷しても周りのダンボールが汚れていたら返品するという話を聞いたことがあります。中身は全然大丈夫にもかかわらず、です。アメリカなどは缶詰の缶が少々凹んでいたりしても、多分売っています。ある意味で過剰な潔癖さのようなことが無駄を増やしている面も、ひょっとしたらあるのかもしれませんが。

上田：統計的数字がどこまで正確に現実を反映しているかということについては、私も以前食料廃棄について調べたときに、同じ調べ方をして同じ数字を出しているのか疑問に思った面もありました。今後できるだけ信頼できる数字という視点で調べてみる必要があるかと思います。

中田さんの仰るように、私たちの普段の生活を振り返ってみても、お話しいただいた賞味期限に関する商慣行にしても、潔癖であるということも反映されていて、どう考えても多いなということは打ち消し難いので、その買い方などは考えていかないといけないなと思います。

フードバンクについて取材したこともありますが、一流の企業に話をもっていっても相手にしてくれないという現状が随分あったみたいです。少しでも食中毒の可能性があるものを扱うということそのものを拒否するみたいな習慣が強いというふうに聞きました。

そういうことも含めて変えなければいけないことは相当あるのだろうなという気はします。

Q：そういうことも消費者の社会的責任ということにつながっていきますよね。

中田：それもあるのですが、流通とか外食の人は常に「消費者が求めているから」という言い方をしますが、それが全て正しいのかなという感じがしなくもありません。

Q：日本の高度成長は内需だったという話があります。しかし最近の流れをみると外需外需という掛け声があって、TPPでも農業も外国に果物を輸出してすごくうまくいっていると宣伝しているわけです。

一方で内需の方が大事だという声はなかなか説得力がない。農業こそ内需が中心であるべきだと思うのですが、なかなかそういう掛け声は聞こえてきません。

例えば香港でリンゴが沢山売れると、売るためにはすごく設備投資をしなければならないという話で、それが商社なら海外の高級志向が変わったといったときにすぐに転換ができるかもしれないが、地方の農協のようなところに工場を建てて香港の志向が変わったとかいうときに大きな赤字が出て、そのうち海外に果物を売っていた農業者の方が、海外の事情がちょっと変わっただけで影響を受けてしまうことが心配です。

そういうリスクヘッジというか、大きくは国の政策だったのに個人が投資して失敗した場合になんのケアもないのではないというようなことが心配だが、そのあたりのことはいかがでしょうか。

中田：国内は人口も減るし少子高齢化も進むので、国内需要はこれ以上増えないと、米だってあんなにどんどん減っているという状況の中で輸出をしないと、国内農業の発展はないのではないかという考え方もあります。

そのために農水省としてもいろいろな輸出環境を整備したり、情報を一元化して集めて協議会を作る等により、大規模生産者だけではなく意欲のある人にはチャンスを与えようということは考えています。

Q：内需でベーシックなインカムを確保しておいて、海外で売った分はボーナスで儲かった分でもよかったねという感覚だったらすごく良いと思うのですが。

中田：基本はそうだと思いますが、輸出で難しいのは輸出相手国の検疫ですね。特に中国は日本産米の輸入についてかなり厳しい条件を課してきています。また、アメリカに牛肉を輸出しようとする国内のと畜場をアメリカの基準にあったものに整備し直さなければならない。そういう難しい面は確かにあります。

ただ、如何にも輸出が日本の農業を救う唯一の決め手のような議論については私は与しません。輸出振興は実はフード・マイレージの考えに反することになってしまうのですが、それはともかく、他の国と比べて日本は輸入に比べ輸出が非常に少なく、バランスがとれていない。もう少し輸出してもいいのかな、海外の美味しいものも買いますし、日本の美味しいものも海外に売っていくということもあってよいのかなと思います。

日本が内需中心だったというのはその通りの面もありますが、貿易依存度をみると EU などよりもちろん低いです。しかし EU は近隣国で纏まっていますので、EU ができる昔から域内貿易をやっていました。それに比べると日本の貿易依存度は低いです、アメリカよりは高いのです。だから日本の高度成長は内需が中心だったかもしれませんが、輸出の貢献もあったのだろうと考えています。

上田：今日は長時間にわたりありがとうございました。 (終)